



京都市立美術工芸高等学校 卒業生インタビュー

平成19年卒業
大学教員(花園大学)

芦田 風馬

「“何もない”から生み出す力は、
美術から学んだ」

ゼロから生み出すことの難しさと尊さ

美術工芸高校を卒業して、もうすぐ20年が経とうとしています。この間、さまざまなことがありましたが、変わらず続けてきたのは、高校時代に出会った彫刻制作と、現在の仕事にも関わる「教育」について考えることです。

私は現在、花園大学児童福祉学科で幼児の造形活動に関する授業を担当し、幼稚園教諭や保育士を目指す大学生の指導を行っています。幼稚園や保育園の頃を思い返すと、子どもたちは自由にのびのびと絵を描き、物を作り、素直に表現していたことと思います。私は、そうした子どもたちの表現活動に寄り添える先生を育成するため、クレヨンやパス、絵の具はもちろん、粘土やさまざまな素材を使いながら、作ることの楽しさを伝えようと日々努めています。

一方で、彫刻制作も続けています。美術工芸高校で学んだ人体の具象彫刻を、大学、大学院と進んでもさらに深め、公募展である日展への出品を続けています。

教員になろうと思ったきっかけは高校3年生の頃、担任の先生の助言を受け、「自分の好きなことや得意なことを伝えたい」と考えたことがきっかけでした。その後、小学校教諭の免許

と中高の美術教諭の免許を取得し、現在は大学で指導を行っています。

私は美術工芸高校から美術を専門的に学び、今、特に大切にしていることを二つ述べようと思います。1つ目は、「0から生み出すことの難しさと尊さ」です。美術の持つ力は大きいと、日々実感しています。高校生の頃は、ひたすら彫刻に打ち込み、制作に励んでいましたが、そのときは自分にどのような力がついているのか、実感するのは難しかったように思います。



美術の成果は、すぐに目に見える形で表れるものではないのかもしれませんが。しかし今振り返ると、表現したいテーマに合わせて材料を選び、適切な表現方法を模索するという「0から何かを生み出す力」は、私自身を前向きにし、新しいことに挑戦する原動力となっていると感じます。

何も無いものを作り出すという言わば自由であればあるほど不自由と感じ難いことでもあります。しかしこれは美術に限らず、さまざまな場面で必要とされ、新しく始めるすべてのことに関わる力だと考えます。

この力を培えたのは、彫刻だけでなく、美術工芸高校で多様な美術分野に触れ、優れた用具や環境、先生方に恵まれたからこそだと思います。技術面だけでなく、精神的な成長を重ねることができた場だったのだと、改めて感じています。

2つ目は、「自分を表現することの喜び」です。私は現在も彫刻制作を続けており、年に数回、公募展に出品しています。人間の形を作ることが多いため、作品に込めた想いや雰囲気、ストレートに鑑賞者へ伝わることに魅力を感じています。制作の過程ではさまざまな困難もありますが、思い通りの形になったときの達成感は何ものにも代えがたいものです。



「表現してみたい」その気持ちがあるからこそ

現在の仕事では、大学生とともに物づくりを通じた授業を行っています。しかし、中学校以来、美術から離れていた学生も多く、絵を描くことや物を作ることに苦手意識を持っている人も少なくありません。多くの人にとって、中学校を卒業して以来、絵の具や筆を手にする機会はほとんどないかもしれません。

そうした大学生には、「苦手でもいいから、楽しむことから始めよう」と伝えていきます。彼らは芸術家を目指しているわけではないので、写実的な作品を作る必要はありません。

しかし、「何かを表現してみたい」という気持ちは、とても大切です。私自身も、その気持ちがあったからこそ、学生や子どもたちに表現する楽しさを直接伝えることができていたのだと思います。

そんな私は3人の子どもの恵まれ、仕事と家事・育児に追われる毎日ですが、未来を担う子どもたちには、美術を通して豊かな感性を育ててほしいと願っています。子どもたちを支える先生や保育者にとっても、表現の大切さを伝えることが重要だと感じおり少しでも自身が貢献できればと考えています。

最後になりますが現代社会、これからの社会では多様性が重視されています。これからの時代は、自分の考えや思いを思い切って主張できる社会へと進んでいくのではないのでしょうか。誰かのアドバイスを受けながら前に進むことも大切ですが、自ら主体的に行動し、興味のあることを徹底的に追求し、「好きなものは好き」と自信を持って言える心も大切だと思います。そして、そのような心を育み、自由に表現できる場こそが、美術工芸高校なのではないでしょうか。

